ビハーラセミナー

秋田の民俗と「癒し」

秋田市　民俗研究家　斎藤　寿胤　先生

平成13年3月19日　鷹巣阿仁広域交流センター

「信仰と癒し」というシリーズでのセミナーの第１回目として、秋田県の様々な民俗を研究されている斎藤先生をお招きしました。
神官としてのお仕事のみならず、民俗学の分野では全国レベルの活動をされている方でもあります。現代あちこちで廃れつつある地域の風習には、実は現代の「癒し」にも通じる大切な意義があったことを再確認させていただいた有意義なお話でした。

「老い」と民俗

秋田県を中心に民俗調査を行いながら日々を過ごしております。このたび、「癒し」というテーマを与えられまして、はじめに頭に浮かんだのが、私が日頃接している、地域の古老と言われる方々のことでした。

民俗調査と言いますのは、昔の言い伝えや習わしなどを丹念に訪ねてゆくことによって、日本人の心性を探ろうとするところに目的の一つがあります。その場合、古きことを訪ねてゆくのですから、当然、お年寄り達と接する機会が多くなります。調査の目的とするところにたどり着くその前に、まず私達は「老い」という現実を目の当たりにしているわけです。調査者と被調査者という間柄ではありますが、それとは別の視点から、「老い」の問題に民俗学はいかに向き合っていけるのか、と考えるのです。

しかし、そうした問題の立て方自体、民俗学の中ではあまり試みられてきたわけではありませんでした。高齢化社会に突入したこの段階では、民俗とは何かということをまともに論じてこなかったきらいがあります。この点に関して私は自ら反省しなければならないと考えています。老人の方々から資料を得るために利用するだけ利用して、老人という問題を置き去りにしてきたんだろうと考えるわけです。

それでもわずかな光明があるような気もしています。私は、25以上にわたる民俗調査・資料研究にあたって参りましたが、その時々においてほとんど同じ体験をしてきました。というのは話者であるその古老たちの多くが、インフォーマント（話し手）として、とても生き生きとしているのを感じるのです。民俗資料のほとんどはその人たちの生活体験・伝承によるもので、その生き方、生き様が資料になっています。人と対面、面談して丹念に聞き取るという方法をしてきたわけであります。そうした面談をしてきた多くの古老たちは、「あんたそんな昔のことを聞いて何になるのだ」と言われます。最初は何も知らないと言いますが、話しているうちに思い出して生き生きとしてくる。

たぶん相当難儀したり、苦しい体験をしてきた人たちも、豊かな表情で語るのがほとんどという経験をしてきたわけであります。孫は昔の話などうるさいと言うし、自分の子供たちにも古臭いと否定され続けてきた中で、私達調査者が古老に接して話を聞き出すわけです。古老たちは喜んで話をしてくれる場合が非常に多いわけで、最後

に「また来てくれや」と必ず言われるのです。そういう話を聞いてもらうのが実は楽しみということがしばしばありました。

民俗調査もある意味、古老たちの癒しになっていると思います。古老の心のひだに分け入って、彼らの人間的営みを十分理解しながら心の通い合いを通じて、そこからにじみ出てくるような民俗文化をとらえなければならないと考えている訳でありますが、民俗調査も一つの癒しかも知れないなと今となっては思います。老人たちの老いと死と癒しに一片の力を貸しているという不遜な思いをしているわけです。

老人たちの老いと死の問題において、ポックリ死ということを考えてみたいと思います。これも民俗文化として考えてみると非常に興味深いことがわかります。高齢化社会のひとつの民俗事象といえるのではないかと思います。ポックリ信仰、これは奈良県斑鳩の吉田寺が有名ですが、各地にそれに類したものがはやり出してポックリ寺、ポックリ地蔵があります。ポックリ死は一種の大往生を言っているのだと思います。いわば安楽死を望む信仰ですが、近年脳死や臓器移植、臨死などと深くかかわっていることもポックリ信仰の事象を見れば明らかです。

話はちょっと逸れますが、臓器移植については皆様といろいろ話し合いたいと思いますが、公共広告機構で「皆さんの臓器を提供してくれますか」とラジオなどでずいぶん宣伝していますね。「あなたの意思表示をはっきりしてください」とありますが、あの中の男女の会話で、男性は「私は提供します」に○を付けたが、女性は親がだめだというから○を付けませんという言い方をしています。どうも私の僻みかもしれませんが、臓器提供を拒否すること自体が一種の後ろめたさか、罪悪のような印象を受けるような気がします。必ず「提供しません」に○を付けなければならないのだろうか、カードを持たないことが拒否したものとほぼ同じだろうと思うのだが、そういう拒否の仕方があり得ませんでしょうか。このようなあいまいさが癒しにつながっているのだと思っています。そのようなアバウトなことを見直す必要があるのではと私は思っていますが、あのCMにはどうも作為的な印象を受けるのです。

ポックリ死は安楽死を願う一種、あるいはボケ老人の悲願の対象となっているもので、静かにあの世に往生したいという切なる願いであります。ポックリ、コロリは安楽死の状態を見事に言っている言葉で、おどろおどろしいイメージは恐らく無いと思います。むしろあっけらかんとしたイメージがあるが、その裏には老人たちの心願を反映して高齢化社会であるが故に不安を表明するという新しい民俗事象となっている。だから、それに当たるものがポックリ信仰以前にあったという指摘もあります。

ある民俗研究者が「末期の水」のことを述べています。皆様ご承知の末期の水ですが、これは安楽死に関係しているのでは、という指摘です。病人に最期に飲ませる水ですが、死期に近づいた病人がしきりに水を欲しがる。水は水道の水ではなく、ある清らかな水、井戸などを含め聖なる水として霊場に近いところからもらってきた水であることが必要条件です。

私の個人的なことから申し上げますと、祖母が死ぬ直前枕元に小さい私を呼んで、「オチコ沢の水が欲しい」というので、やかんで汲んできてそれを美味そうに飲んで、やがて息を引き取った記憶があります。そのオチコ沢の水とは皆さんもご存知と思いますが、私の生家の近くの沢合にある非常に清らかな水で、涸れることなくい

つもこんこんと湧いている水です。

こうした事例はあちこちにみられます。これを私は丹念に拾ってみているわけですが、やはり一つの霊場に近い存在であろう、水を欲しがる死期を悟った人に水を与えることは、それを飲めば死ぬということで死を助長しているようなものです。臨終に際して水を与えることは、水を飲んで安らかに息を引き取るのは一種の安楽死と受け取れないこともないんですね。死に水を実に美味そうに飲むということは、周囲の人たちが暗黙のうちに死を認めていることが前提になっている。死に水を取って安らかに目を落とすことは、周囲の人々が死を認めていることが前提になっていなければ、安楽死は成り立たない、そう分析することができます。臨終を早めることになるかも知れないけれど、周囲の人が、つまり社会的という言葉に置き換えてみても、その死を自他ともに安らかに迎えたということを認める、そのことにあるだろう、恐らくここに認められる民俗文化の中に、癒しというものがまた一つあるのではないかと思うわけであります。

このようなことをいろいろ考えてみますと、不安とか危機に際して、このあいまいの部分が癒しにつながったのではないかと思うんですね。それらのことを社会的に容認され周辺の人もあいまいの中に認めてきたということは、そこで安心して死んでもらえるなと思えるのではなかったかと思います。

「病」はどこからくるのか

死をもたらすものとして、たいていは病気がありました。老いもありますが老いと同時に病気に対する抵抗も少なくなるわけで、病が圧倒して死に至らしめるという事実があります。病は最終的に死をもたらすものとして恐れられてきた、そのためあらゆる時に病にかからないように注意して、それと同時に病の原因となる「モノ」、モノノケに通じるモノを追い出したり、近づかないようにする、すなわち病は死をもたらす最たるものであったわけです。それは常に自己の内部から起こるものでなく、外からやって来るものだと考えられてきました。老人が「そろそろお迎えが来る」などと言うように、向こうからやって来るものだということです。時間的な考え方もありますが、時間の先、我々がここにいる瞬間、その場で消費して行くうちにやって来るものを受けて、だんだん前に行く考え方もある、だからお迎えが来るなどということと同時に、病気とは内部でなく外からやってくるものと考えられてきました。

本荘市の赤沼地域、組合病院が近くにある今は新興住宅地ですが、ここに「ヤメノカミボイ」という行事があります。これは集落の人たちがこぞって参加し、一人の力では誠に心もとないわけでありますが、多数の人数で、集団的に行うことによってより大きな力を期待して、さらに共同社会の内側にできるだけトラブルが無いように努めるという配慮が見受けられる行事です。ヤメノカミボイとはどんな行事かというと、神社でご祈祷してそこからみんなでお札としめ縄と太鼓、獅子頭を持ってみんなで集落の入り口という入り口をぜんぶ回ってくる、そこで獅子頭でお払いしてしめ縄

を張ってお札を貼って、今は電柱とか大きな通りに面してお札を貼ってくる。車で通っても気をつければ見ることができます。こうした行事は赤沼に限ったわけでなく他にも行われています。鹿角の尾去沢地区でもありますし、あちこちで見られます。

このようにヤメノカミボイ、つまり日本民俗的には病や悪霊を鎮めるには二つあって、一つは丁重に送り出すこと、もう一つは丁重にこれを鎮めること、これは古代の鎮魂の方法と同じでタマオクリとタマシズメの二つによく似ているわけで、古典的形式が見られるわけですが、丁重に境に追い出された神様はどこに行くのか、隣村に行ったら隣村はえらい迷惑でしょうが、それも合理的にいろいろ考えることができるし、民俗的にはそれも合理的に処理されてきたわけであります。

それでは、病気はいったいどのようなことで起きるかを考えると、結核を含めて伝染性の病気などは火というもので十分あぶられたものがわっと噴出すように考えられていたわけです。これらの元は細菌であると誰でもわかるようになったのはごく最近のことです。そこでは目に見えない荒ぶるものがあって、その手によってサイカ、バンタンによって引き起こされるというように考えられました。それは病気に“なる”と言わずに、病気が“つく”という言葉からも、民俗理論上伺えます。

これはお許しいただきたいが、今日の話もあるいは差別につながる用語があったら不本意でありまして、本心から差別など思っていませんのでその点は誤解のないようにしていただきたい。もしあったら訂正するのにやぶさかではありません。

一つに「中風たかり」という言葉があります。脳卒中、中風になった人を言うわけですが、あるいは「神経たかり」という。病気“たかり”はしらみが“たかる”とか蝿が“たかる”とか、取り付く、まとわりつくなどの意味もあることはご承知のことと思います。「あそこの家は病気たかり」といえば、その家に何代も続いた家系のようにしがみついたもの、こうしたものとして見ている場合もあり、それにしても“たかり”とか“たかる”とかの言葉は病気は外から来て身体にまとわりつく、だから病になると考えられ、そしてそれらは主に火というものによって伝わっていくと考えられていました。

ヒとは今日は日が悪いから延期とか、忌み嫌ってきた。ヒはファイヤーに近いもので燃え広がって行くような、悪い言葉に使われてきた伝染する感じ、日でなく火であろう、忌避する病気が移る状況をいいます。それは病原菌が移る、転移する状況とほぼ同じと考えられてきましたが、病原菌とか科学的な因縁、あるものに接したり交渉したりすることによって多くなると考えられてきた。それは構造や理論として、今に通じたことになるであろうということなんですね。

ところで病気を起こすものが取り付けば、それを追い払わなければ、追い落とさなければならない。たかると言うことはとりつくのでありますから、今度は“ほろ

わ”なければなりません。この“ほろく”という言葉は大変興味深い言葉ですが、とにかくほろってやらなければなりません。ほろく、つまり取り除くには様々の方法がある。

岩手の高原の例ですが、例えば岩手県野田町新山に伝わっている方法では、家を出るときは元気であったが外で病気になって送られてきた場合に、または担がれるようにして帰ってきた場合、すぐ家に入れないで、家の前に筵を敷いてそこにいったん寝かせ、一人が鍋を持ってきて頭にがばっとかぶせ、もう一人が農具の箕を逆さに持って三回扇ぐ。それが終わらないと家に入れられない。恐らくこれは“たかって”いる病気を払い落とす、ほろってやるということです。

この箕という道具は非常に呪力的には効果的なもので、秋田では火事のとき自分の家に火が移らないように扇ぐ、風が変わるということです。扇がれた方はたまったものではないでしょうが、必死になって扇ぐと風が変わって類焼を免れるという。箕はそれだけ力を持つと考えられています。これがどこに起因するかというと、古くにヤマトタケルの古事記に書かれています。タケルがや焼津で火攻めに遭うが、そこに出てきたネズミが助けるわけです。ヒレを振って火が消えてヤマトタケルは助かった。焼津神社の伝承で今でもそう語られているし、古事記でも書かれています。それらのことから、箕に力があると考えられたのだろうと思います。

箕はいろんな場合に使われますが、お正月にはお供物をあげたり、お月様にお餅をあげたり、秋の収穫の時には最初に刈り取った稲穂を神に感謝してお供えしたり、一つの祭祀具として使われてきた特殊な存在であったと思われます。箕に入ると体が

小さくなるとか跨ぐといけないとか、地べたに置いて保管するなとか、それに禁忌といいますか、しきたりは大変多いわけであります。そんなことを考え合わせるとこの箕は大変力のあった呪具であったといえます。釜石市、あるいは三陸町の下堀井というところでは家の外で死んだ人、事故あるいは自殺とかで、今では病院で死んだ人を家に入れるときは、これも箕を裏返しにして三回扇ぐことにしている。どうやら病気の元となるものは、死んでもなお追い出す、ほろく必要があるということが考えられます。

「死」をもたらすもの

死をもたらすものは大方が病であるということは先程申しましたが、「大病振る舞い」「大病知らせ」などが良く知られておりまして、秋田県内に事例が沢山あります。本荘などでは「大病振る舞い」といって、今にも死にそうな間もなく死期が訪れる、あるいは万一死んでしまったことが分かるとその時はすぐさま親類縁者全部呼んで宴会をします。酒宴を行って、最後の手段として大勢で大病を追い出そうとした方

法だろうと考えられるんですね。あるいは多勢で病気の元を少しずつ分けて、しかも酒宴を張るぐらい元気な人たちで駆逐してしまおうとしたのでしょう。地元ではそれまでいろいろと迷惑かけてきたお礼の意味で一杯飲んでもらうと解釈していますが、おそらくそればかりでないと思いますね。

ここで死をもたらす“モノ”というのは、死を引き起こすことになった病気、その病気を仕掛けた何“モノ”かにある、その因であることに気がついていた、だから何とかしようとした意識がこの癒しにつながっていたと考えられます。

そのような風習がたくさんありますが、ちょっとだけ触れてみますと、「アトミラズ」という風習があります。それから「タマオクリ」風習、民俗学辞典を記してありますが、こうした霊魂の問題を考えてきた結果に他ならないと思えるわけです。ここにあります通り、大概は墓に埋葬に行く前にいち早く「こも」とか「かます」とかを縄で引っ掛けて墓に行って置いてくるか、あるいは途中まで持って来てまた一緒に行列に加わるとかですね。八竜では墓の後ろの木にぶら下げたりするところが多い。この様に、墓にいち早く行くという習俗は大変興味深いもので、全国的にはあまりみられない風習が、秋田県のある地域では濃密にみられるわけです。民俗というのは一般に周辺まで伝播していく可能性がありますが、能代の北側にも飛んでいることが興味深いですね。

田代町には「ドウモツ」という風習があります。これはダミより一足先に出て寺に行くわけですが、行列を組むとき一番最初に「ドウモツ」誰それと名前が呼ばれて、帰りは少し遅れてきた行列と寺の門ですれ違うようにする。「ドウモツ」というのは白衣を着ていたらしいんですね。この「ドウモツ」は寺に対する亡くなった人の形見といわれています。死者が女性であれば帯や着物の入っていた、一つの荷室というか箱を意味していたといわれています。今は「ドウモツ代」と表書きしてお金を入れているらしいんですが、これは聞き書きで実際は見たわけではないのですが、このような風習が田代町にあってこの「アトミラズ」に非常に近い風習を知り得たわけです。これは一つの「タマオクリ」の風習と思われますが、霊魂の問題としてもう少し深く考えてみなければならない。おそらく、亡くなった人に関して風習の意味だとかを的確に答える人はいませんけれど、これを「タマオクリ」だと言っている我々も穿った考え方かもしれません。このようなことを行うことによって、一つの安心感とか癒しとかになっていたのではないかと考えられるんですね。口はばったい言い方ですが、こうした今やっている事をお坊さん方から聞いても「全然教義にもないし、そんなものはやめてしまえ」と言っている方もいました。確かに教義という問題もあるでしょうが、そういう教義と民俗的なものとの接触の仕方とはまた違うのではないでしょうか。

今私が非常に考えることは、そうした民俗的な葬送儀礼は地域によって相当な格差・差異があります。いろんな風習が違う。それはそれなりに地域で興してきた「癒し」につながる、非常に安心できる一つの葬送方法だろうと思えるわけです。それらをただ単にやるということ自体が、何も意味を考えなくてもその地域に生きて死ぬということができる素直な意味でない

か。現在はそのように集落全体が葬式に立ち会うことが少なくなりました。それから病院で亡くなることも多いわけで、その場合は家族がその臨終に接することも少ないのですが、かつて家で亡くなった場合はどうしていたか。やはり周囲の人々が枕団子を作って、その時臼で米をつく音がすると、ああ、あそこの家で誰か亡くなったと判る。これは一様に地域の人々が言っている訳で、死は集落全体に広まっていくわけです。病院で亡くなった場合は電話であちこちに知らせなければ判らないわけで、地域の人はその臼をつくという一つの行事で全体がその死というものを認知することができた。そうしていろんな行事が組み立てられ、葬送儀礼が行われていくわけであります。そこに人々は安心感、癒しを得たのではないでしょうか。

地域の霊性の復活

現代は地域の「霊性」を失っているのだと思う。例えばお祭りを見ていくと、その一つ一つが地域社会論でくくれるものがあるわけで、近代科学では地域社会論と言い換えて目に見えない世界、日本的に言えば霊的な世界、宗教的社会という発想を無視して地域社会論を展開してきたのが一般のコミュニティを形成してこの現象だけを問題としてきた、これが近代の地域社会論の分析でしょう。確かにそういう面はあるわけで、近代科学は見えない世界を全く論じていないという特徴があるわけですが、見えない世界を論じないということは見えない世界を無視することになってしまう。こういう恐れがあります。

伝統的社会が持っていた神、あるいは先祖、霊的な世界が欠落された村落社会の構造の分析を主としてきた、それが科学だという。しかし地域社会には神、先祖が

厳然として存在するわけで、要するに見える世界と見えない世界の共存によって成り立っていることを見落として、わざと科学という名の下において消し去ろうとしています。世俗化した時代のコミュニティ論では、少なくとも神社寺院とか路傍の石神仏などの新しい位置づけがまったくなされていないわけで、死者をどう組み込むかの発想が欠如しています。したがって地域計画、都市計画とか農村工学とか、技術的表面だけで「活性化」とか「生きた社会」などと言ったりしています。そういう言い方のみで、見えない社会があって地域社会が構成されてきたということを忘れている。死者の位置付け無くして構成されてきた近代の地域のあり方は、本当に文化的とは言えない。長い人類文化の中で、近代はこの部分が非常に忘れられていると思います。

地域社会の最大特色は周りの自然と神々、先祖、霊的なものも含めて、それらを認めて一つのコスモロジーとしてきたものであって、このコスモロジーを解決して奉仕的なコミュニティが存在するという、この構造が何かをないがしろにして、現象面だけをとらえていることが、近代の地域の崩壊の原因の一つと考えられます。

柳田國男の民俗学の中に「家郷」という言葉がありますが、「イエ」の概念が伝統的社会を形成してきたというように考えられるわけで、氏神も先祖もひとつのコスモロジーの中に取り込まれて、はじめて人と生きるコミュニケーションがあるというのが家郷なわけであります。それらを持ち伝

えることによって、当然愛郷心にもつながると同時に、住む人にも安心、安定感というものが伝わるだろう。現在その見えない世界が否定されてしまって、おろおろするのが老人とか弱者だとかいわれる意味ではないかと思う。それらはかつて行ってきた風習を否定されることによって、やはり何らかの形で不安を持つということが考えられるわけであります。これだけ持ち伝えられてきた伝統的な弱者の民俗文化なり伝承性のあるものが、近代科学に否定され、まったく立つ瀬が無いのではないでしょうか。後戻りということはおそらくできないかもしれません。しかしながら、そこから得られる知恵が多くあると思う。それらを新たな展開としていかなければならない。たとえば先祖や墓、葬式という、伝統的な部分で霊性を認めてきた儀式、民俗信仰は地域社会にこそ生きられるのであって、それを否定されては今までのことは無意味なんだよ、というように言われている。孫や自分の子供でさえも年寄りの話を聞いてくれない現代は、老人やその人々の生き様までも否定していることにつながっているのではないか。

これらの対処の仕方を、人が人にしようとする、ーまさにターミナルケアもそうだと思うがー、その対象の一つとされるわけですが、人と人のみでコミュニティを築き上げようとするのはいかがなものか。その部分は、ターミナルケアでさえ実は足りないのだといわれる。私は、この技術的問題のみで解決しようとするばかりでなく、むしろ今申し上げた民俗文化、地域社会にかつてあった霊性とか目に見えない世界の存在、先祖、地域のかげの存在を具体的にしていく必要があるのではないかと思います。

最も大切な「森羅万象に神が宿る」と認識してきた我々の先祖の考えは、ものを大切にするとか恐れかしこむ、敬うという認識が内在しているわけです。こうした自然神、そのはじめは先祖の霊も同一に考えられる、先祖の霊に対しての畏敬の念は、通常墓は人家よりも下にはしないものとされていることからもわかります。山の端っことか小高い丘とか、少し高いところに墓をしつらえて、人の霊は肉体を離れて眺めの良い山に登って、やがて天に登る、天からあの世に行き、しかし先祖の霊は常に子孫を見守るところにいる。そして正月、またお盆に数回子孫と交わりを持つ、いわゆるこれが祭りで死者と生者が心のかかわりを持つということなのでしょう。心の交感はそのまま死生感として通じてきたわけです。

このように考えてみれば、知らず知らずのうちにこれまで培った伝承文化・伝統文化あるいは民俗文化、一つ一つを新たな目で点検することによって、その生き方を選択してきた多くの人々、つまり老人が何の愁えることもなく生きてゆくことの出来る道に出会う、そのことに通じるのではないか。このとき民俗文化の中に生きる癒しというものが一つのキーワードとなるのではないでしょうか。

ご静聴ありがとうございました。

ビハーラ公開講座

演題「ほとけさまの力」

駒澤大学名誉教授　佐々木宏幹先生

平成13年9月30日　鷹巣町　鷹阿仁広域交流センター

前年にも公開講座の講師として鷹巣にお越しいただき、大変好評をいただいた佐々木宏幹先生を再度お招きして「ビハーラ公開講座」が上記の日程で行われました。

当日は秋晴れの日曜日、会場の広域交流センター大ホールが満杯になるほどの約300名以上のご来場をいただき、盛会に終えることができました。

今回は「ほとけさまの力」と題したお話でしたが、直前に起こったアメリカでの同時多発テロに関連して、宗教による純粋さが時には人を殺してしまう怖さも持ち合わせていると同時に、人を生かす、安心させるという力も持ち合わせていることを丁寧に分かりやすくお話しいただき、お越しの方々から感謝の声が多数寄せられました。

★当日のアンケートより★

（有効回答数　90）

★年齢・性別

	30代以下	40代	50代	60代	70代以上	不明	計
男性	1	0	3	5	9		18
女性	0	3	3	31	31	2	70
不明				1	1		2
計	1	3	6	37	41	2	90

★今日の講演会を何によって知りましたか？（複数回答）

a.　お寺からの紹介　・・・49

b.　知人からの紹介　・・・12

c.　新聞記事　・・・32

d.　ポスター・パンフレット　・・・2

e.　その他　・・・5

（ビハーラからのお知らせ･町の広報等）

★講演についてのご感想

・ありがとうございました。夫に先立たれ、ほとけのことをいろいろ考えさせられていた時だったので、「ほとけさまの力」ということを何となく少しわかったように思います。　（60代　女性）

・「一神教、多神教、仏さま、悟り、いのち」いろいろ勉強になりました。でもまだまだ理解できないことも多くありました。機会があったらまた聞きたいと思います。

（70代以上　男性）

・人生観、死生観、共感しました。

（50代　女性）

・わかりやすくもっと多くの人に聞かせたいと思いました。とてもよいお話でした。
（60代　女性）

・人生訓として感謝いたします。
（70代以上　男性）

・わかりやすかった。　（30代以下　男性）

・死について考えさせられる苦しい一年を過ごしました。今日先生のお話を伺って、自分の心を少し開いてみようかと思いました。ありがとうございました。
（50代　女性）

・お寺に行く度「南無帰依仏」と手を合わせている意味を少しわかったような気がしました。　（70代以上　女性）

・仏教と現代人（現代社会）との関係を問う場は、いろんなレベルで一番今求められていることと存じます。その現状を聞きたくて来たのですが。　（50代　男性）

・とても勉強になりました。判りやすく説明してくれました。テロ事件と宗教戦争のことが特によく判りました。（60代　女性）

・大変人生訓として参考になりました。
サンキュー。　（60代　男性）

・宗教の本を読むこともないし、話を聞く機会もあまりないが、とてもわかり易いよいお話でした。　（70代以上　男性）

・有難く聴講させて頂きました。昨年講演のブックレットを読んで復習してみたいと思います。　（50代　男性）

・昨年の講演でただただ感動し、有難く思いました。日本人に生まれて大変幸せに思いました。先立って往った人に会えることが楽しみです。ありがとうございました。
（70代以上　女性）

・わかり易いお話といっても私のような老人には難しいとも思いました。でも、素晴らしいお話を聞けて幸せだと思います。
（女性）

★主催者ビハーラに対するご意見

・このような講座を聞くことが少ないので、とてもいろいろなことにつながる刺激を受けました。時間をつくってこれからも参加したいのでよろしくお願いします。
（60代　女性）

・私達の宗教意識をよりよい方向に育てて下さり、ありがたく思います。
（70代以上　男性）

・現代の荒れた世の中で、よくがんばっておられると思います。今後もがんばって下さい。　（70代以上　男性）

・農繁期を少し避けてもらえれば、まだ聞きに来られる方もいると思います。
（50代　女性）

・継続しての講演を求めます。
（50代　男性）

・終末医療に関わる活動に敬意を表します。　（50代　男性）

・来年も楽しみにしております。
（70代以上　女性）

****

◆アンケートのご協力、また貴重なご意見ご感想ありがとうございました。今後の企画運営の参考にさせていただきます。

※なお、会場では前年の公開講座における佐々木先生のお話をまとめたブックレット『日本人の死生観と癒し』も販売されました(会員の皆さんには１冊まで無料配布)。会員以外の方、もしくは２冊以上ご希望の方は、１部300円にてお分けします。事務局（巻末参照）までご連絡下さい。

ビハーラ　秋のレクレーション

田沢湖・角館バスの旅

10月４・５日

残念ながら春はお流れになってしまった恒例のビハーラのレクレーションですが、それを補って余りある楽しく有意義な秋のレクレーションとなりました。

「たざわこ芸術村」にてミュージカル「アテルイ」を観劇し、隣接の「温泉ゆぽぽ」にて宴会・宿泊。2日目は角舘町の龍巌寺さま・雲巌寺さまを拝登し、角館の武家屋敷などを散策という優雅な2日間でした。

参加された岩澤さんから寄せられた旅行記を掲載します。

岩澤　サチ子

ハーイ、皆さん、私達行ってきました。10月４・５日、参加者15名。待ちに待った“ビハーラ秋の遠足”一泊バスの旅田沢湖・角館へと。楽しかったー。ほんと楽しかった。

出発時はわずか13名、時々チラチラ会う仲間だったけど、秋晴れのもとam11:00、バス出発。と同時にはじけんばかりの若さと和気藹々が炸裂、さながら同窓会のような、家族会のような、何とも言いがたいムードと揺れるバスに酔いながら、峠を越えてバスは行く。

（非礼ながら敬愛を込めて）ドライバー・賢ちゃん、ナビ・俊ちゃん、２人は名迷？コンビ（賢ちゃんは帰りも名ドライバー、ご苦労様でした）。

ゆく道は　西木の栗の　はぜる音

そんなこと思うそこそこ、バスは「たざわこ芸術村」に到着。ここで松田ご夫妻と合流、全メンバー勢揃い。他の多くの観客と一緒にわらび座観劇し、大感激。轟く太鼓の響きと共に現れた“アテルイ”は芸術村にいて蝦夷のヒーローだった。

が、私たちのヒーローは、何てったって亀谷さん。「相撲甚句」の終わりの“ジューッ！”は最高。また聴きたい!!会員の皆さんにも是非聴かせたいね。本当に面白いんですよ。

※ミュージカル「アテルイ―北の燿星」は、たざわこ芸術村のわらび劇場にて公演中。

アテルイとは8世紀から9世紀にかけて、現在の岩手県胆沢地方に実在した人物。胆沢は蝦夷の中でも肥沃な土地であるがゆえ、大和朝廷より再三に渡り戦いをしかけられていた。アテルイは首長として多くの村落をまとめ朝廷軍と戦う。

ちなみに平成14年はアテルイ没後1200年にあたる。

ゆぽぽの一夜は忘れがたい。

松田先生との会話ははずんで、なかなかとどまらず、人生人まかせに歩いている自分にとって、先生のお話の一つひとつに、これでいいのか･･･？と考えさせられる言葉や思いがいっぱいあふれていて、自分の知識の乏しさに閉口、心チクチク。

翌朝は、雨の音で目が覚めた。湯上がりの散策はできなかったけど、日々をせわしく過ごしていただけに随分とゆっくり朝食に向かうことが出来、旅の充実感があらためて心地良く、来てよかったーとブラウニーを一口、薫り立つエスプレッソをくゆらせながら思った訳でして･･･。忘れ物はないかと指差し点検。ロビー集合。すると、ゆぽぽ出発の玄関に、いたいた、おりましたー。ロヒゲなつかしい今井さん。笑顔が懐かしい。今井さんも２日目コースに参加です。

角館の寺めぐりも、それぞれに味わいがあって良かったね。特に龍巌寺の和尚さんのボランティアについてのお話が心に残りました。それから･･･ン？なるとのおいしさが本当は一番良かったかな。

角館駅前でのひとときは何だかみんなすっかりツアー気分だったね。人力車・こまち・漬物・生もろこし等々。でも何と言っても特イチは小さな酒店での試飲。みんなしてあれやこれやと飲ってたネ、買ってたネ。あの時のあのお酒、どうなりましたか･･･。それぞれもう飲んじゃいましたか？少々気になる今日この頃です。もしまだでしたら、一声かけて下されば、いつでも･･･なーんてね。

一路帰宅のバスの中は、ワイワイ、ガヤガヤ、スースー、グーグー。

二日間があっという間に過ぎて、米内沢付近に入る頃には皆、無口になったり余韻に浸ったり。生活感あふれる会話になったりして、旅の終わりを迎えていました。何はともあれ、帰路はあれほどの雨、風、ランプだったのに、鷹巣に着いたらほとんど止んでいて、まぁ何と行いの良い私達ですこと!!

時まさに秋、内陸街道の木の葉達は陽をあびて黄色く色づきはじめ、戻りは更に色増して一露をやどし、時は確かに移ろう。そこにも一つ秋を見つけた。

それからいろんな人に会った。いろんな人の話を聞いた。いろんな人と会話した。そして、行く先々の随所に気配りの見えた旅で、参加できたことがとても嬉しかった。次回はもっといっぱいの皆さんで行きましょう。

旅先では、豊かな明日のための新しい発見や、何かしらの再発見が必ずあります。私にとってのこの旅は、潤いのあるやさしさを再発見した、よいよいずくめの旅でした。

企画なされた皆様、参加なされた皆様、楽しく思い出深い二日間をありがとう。

かさねて、かさねて、謝々。

ビハーラリポート＆ホームページ連動企画

「生老病死ー私はこう思う」

生老病死にまつわる一つのテーマのもとに皆さんのご意見をお寄せいただき、ご紹介するコーナーです。

今回のテーマは、**「私(家族)が臓器を提供するとしたら？移植を受けるとしたら？」**です。

◆医学が進み脳死・臓器提供が行われるようになった現代。この現実がある中で、それぞれがいろいろな考えを持っています。

だからこそ「意思表示」というものが必要になり、そして自己決定は愚かなものであってはならないと思います。現実を見つめ、それに手を差し伸べられる自分ではありたいと思いますが、今現在己の存在を否定している私には自己決定はし難いもので、この存在を肯定した時やっと自らの「意思表示」として受け入れるようになるような気がしています。　（秋田市　女性）

◆私は病院も薬も嫌いです。臓器移植は自然な行為ではないと思うから、もし私だったら移植しないで死を待っていたいです（でも、いざ自分が移植が必要な状態になったら、その時のことはその時になってみないとわからないです）。

何かの本で読んだのですが、「老・病・死」から真実の生かされている意味を学ぶのでしょうね。

（女性）

◆私は臓器移植について、いいことだから積極的に推進すべき、という立場にまだなれません。私の臓器の提供についてはそれほど抵抗はありません。家族のものが脳死になったときに臓器の提供を求められたら、かなり悩むだろうと思いますし、状況によっては拒否することになるかもしれないと思っています。

移植を受ける立場になったら、本当にそれしか選択の余地が無い場合は、いただきたいと思う気持ちは起きるだろうと思います。ただし、それによってある程度日常の活動ができて、自分の人生を全うできると思える場合に限定したいと思います。家族の場合も同じです。

さしあげる臓器もいただく臓器も、いらないからさしあげる、いらなくなったものだからいただく、というような気持ちにならないよう、自分を律したいものだと健康な今は思っています。

セミナーなどでお世話になった、生体腎移植を受けた村越さんのように、自分は命をいただいたのだから、それを同じ苦しみにある仲間のため、そして自分を取り巻く社会のために汗を流す、というような生き方はすがすがしさを感じます。　（ビハーラ代表　袴田俊英）

このコーナーは、普段セミナー等の行事に参加できない会員さんでも、意見交換の場として活用していただければありがたく存じます。

お手数ですが下記まで郵送、FAX、E-mailでお送り下さい。

★諸注意★

- **特にファックスで送られる場合、濃い目の万年筆、ボールペン等でお書きいただき、極端なくずし字や略字はご遠慮下さい。**
- **お名前を掲載してもよい方はその旨ご記入下さい。それ以外は原則として無記名（市町村名と男女の別程度）で掲載いたします。**
- **特定の個人や団体、施設等を誹謗中傷するような記述はご遠慮下さい。**
- **その他、編集の都合上一部修正させていただく場合もありますのでご了承下さい。**

次回のテーマは**「私のがん、家族のがん、告知はどうする？」**です

◎送り先・お問い合わせ◎

〒018-3201　秋田県山本郡藤里町藤琴３　宝昌寺内　ﾋﾞﾊｰﾗﾘﾎﾟｰﾄ担当　新川

TEL 0185-79-1522(FAX 79-1539)　ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ　http://www.ink.or.jp/~shoushin/vihara/

ぶっく　れびゅう
BOOK REVIEW

●墓と葬送の社会史

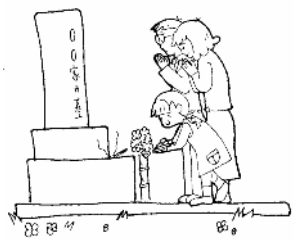
著者　森 謙二

講談社現代新書

６５０円

近年、我が国では「墓不要」「葬儀不要」という声をマスコミ経由で聞くことがありますが、それが一部のエセ文化人達の「無宗教こそ知的・インテリ・個性的」という浅はかな言動の影響下にあるとするならば、それは人間の最も人間たる「亡き人を大切に弔う」文化を崩壊させる愚行でしかなく、それがどんなに殺伐とした社会にさせるのか知れません。首都圏の一部の人々だけでなく、現実にその波は地方にも押し寄せようとしています。

この本では世界各地の墓・葬送について詳細に調査研究された事例が紹介されていますが、我が国だけを見ても、時代と共に変遷してきた歴史があります。ですから現代のお墓や葬儀の形態が変わっていこうとすることは、むしろ自然なことであるといえるのかも知れません。時代や国・地域・民族によって墓や葬儀のあり方は様々ですが、共通するのは「亡き人を大切に弔う」という気持ちであり、その根幹にあるのは、死に対する畏怖の念と亡き人への追慕の念が表裏一体になっていることです。

この本の中で「墓地は社会を映し出す鏡である」というドイツの墓地研究家のハンス・クルト・ベールケの言葉がありますが、まさに歴史を見る限り頷けます。墓や葬送の形態には、その地域や時代の民衆感情が反映されるのみならず、政治的意図が加わる場合があります。それが時として悲劇を生んだり、本来の墓・葬送の意義から逸脱したり、“安心”のための墓や葬送が宗教的立場からすると不本意なことも歴史上ありました。

少子高齢化・核家族化・過疎化などの条件から従来の墓や葬儀の形態を維持することが困難になり、合祀墓や散骨、自然葬など、新たな形態が求められつつある現代、如何にして「亡き人を大切に弔う」文化を守っていくべきか、それがひいては心安らかに生きていくことや地域の豊かさにどうつなげていくかを考えさせられる一冊といえます。